笛吹高校図書館

図書館通信　vol. 14

あけましておめで**ドラゴン♪** 大好きなうさぎに続いて、今年の干支(えと)も辰(たつ)、大好きなドラゴンなのでゴキゲンなせーやさんです。ドラゴンは特別だよね。ほかはみんなこの世に存在している生きものなのに、ドラゴンだけは夢でつくられた生きものなのですから。空想の生きものが干支にまでなってしまうのは、なんだかうれしい気がします。ドラゴンって、人間の想像力のポジティブな面を表しているのではないでしょうか？舞いあがり、空を翔る美しい存在。あこがれの。追いかけたくなりますよね！

BOOK of 2023

『歌われなかった海賊へ』　逢坂冬馬

衝撃のデビュー作にして本屋大賞受賞作**『同志少女よ、敵を撃て』**に続く待望の第二作目だったのですが、これがまたすばらしかった！ 今年度のベスト即決でした！ ヒトラー・ユーゲントに真っ向から対立した、少年たちによる「エーデルヴァイス海賊団」の物語。1944 年、ヒトラーによるナチ体制下のドイツ。ゲシュタポに逮捕され、死刑に処された父親の敵を討つため、密告者である仇敵をナイフで刺し殺そうとしていた十六歳のヴェルナーは、ハーモニカのメロディに阻止される。メロディの主は少女で、ヴェルナーのことを知っており、彼に会いたがっている奴がいることと自分の名前をエルフレーデだと告げて去った。翌日、約束の場所に行くと、裕福な資本家の息子、レオンハルトがいて、彼らはヴェルナーをエーデルヴァイス海賊団にスカウトするのだった。メンバーはこの３人だけ。「ナチなんてクソであり、そう思う自分たちはここにいる。それを示したい」という思いをともにしている３人だ。鉄道敷設の工事に従事していたヴェルナーは、ヒトラー・ユーゲントの若者たちと戦争捕虜がたくさん駆り出されたこの工事を不審に思っていた。空襲警報の隙に事務所で地図を見ると、終着駅の先をさらにレールが延びていて高射砲や鉄条網や地雷で守られていた。何があるのか。エーデルヴァイス海賊団は、それを見届けるためにレールの先を歩くことにした。はたして、操車場だと説明されていたそこは、強制収容所だった。人が満載された貨物列車から、次々と人が降りてきた。降りてこれない人もいた。ナチが行う「究極の悪」を目にした彼らのとった行動とは!?

『存在のすべてを』　塩田武士

『罪の声』の著者の最新作にして最高傑作！「神奈川県警は日本の犯罪史上、類を見ない展開に直面することになる」。序章では、平成３年に起きた「二児同時誘拐事件」が書かれます。厚木で小６の男子が誘拐され、警察が総掛かりでその対応に追われるなか、今度は横浜で４歳の男児誘拐事件が起きる。前代未聞の事態。厚木が囮（おとり）で横浜が本命か。一つ目の事件の男児は無事保護されるが、二つ目の事件で身代金が犯人にうまく渡らず男児・亮（りょう）は戻らなかった。ところが、その３年後にひょっこりと亮は自分の足で帰ってくるのだった。亮の家庭は特殊で、母親は父親と別居し、育児放棄状態で実の子供が誘拐されても無関心で、警察が動こうにも彼の写真１枚ない状態。裕福な祖父母が身代金も用意し、その家に７歳に成長して帰ってきたのだった。それから三十年後の令和３年からが本編。まるで写真のような美少女を描く「写実」のイケメン画家・如月脩（きさらぎしゅう）が、実はあの「二児同時誘拐事件」の亮であることが、写真週刊誌によって明かされる。戻ってきた７歳の亮は、身なりがきれいで、読み書きができ、画力が向上して、きちんと育てられた様子が見受けられた。「空白の３年」。彼は何者かに愛されて育ったのではないか。自らの美術画廊をスタートさせようとしている里穂もその記事を見た。里穂の高校時代の初恋の人だった…。

『藍色時刻の君たちは』　前川ほまれ

ヤングケアラーと東日本大震災、辛いばかりの話になってしまいがちな大きな二つのテーマと向き合い、その先に希望を描き出した感動作！ 山田風太郎賞受賞！ 宮城県の港町に暮らす高校２年生の小羽はヤングケアラーだ。母親が統合失調症のため、家事のすべてはもちろん、妄想に振り回される母親のケアもしなくてはならない。「私って、可哀想に見えます？」「お母さんはずっとこうなので。私にとってはこれが普通なんです」。同情はしてほしくないし、可哀想だと思われたくもない。彼女のことを理解できるのは、双極性障害の祖母の介護をしている同級生の航平と、アルコール依存症の母と幼い弟の面倒を見ている凛子だけだった。ヤングケアラーの３人は結束していた。そんな３人を理解し、力になろうとする大人が現れた。青葉さん。26歳。東京からやってきて、叔父夫婦と同居しながら、中華料理屋を手伝っている女性。３人は彼女におおいに救われるのだった。「いつかちゃんと、手を離しなさいね」「いつか手を離して、誰かにゆだねるんだよ。小羽には小羽の人生があるんだから」。ところが、2011年３月に東日本大震災がやってきて…。

『幽玄Ｆ』　佐藤 究（きわむ）

三島由紀夫と戦闘機へのオマージュ。主人公の名前は、なんと「安永 透（やすながとおる）」。ミシマが超音速戦闘機に搭乗した体験記「Ｆ１０４」を爆発させたような内容です。安永透は、飛行機が大好きな少年だった。小学生のころは、空にジェット旅客機を見つけるや、追いかけて走った。高校生になると、同好の友達ができ、いままで知らずにいた飛行機についてのたくさんの知識を彼から得た。青森県にある航空自衛隊三沢基地の航空祭について知ったのも、彼からだった。「傍若無人な戦闘機に切り裂かれる空」。透は、そこで初めて戦闘機Ｆ－１６が間近に飛ぶ姿を目の当たりにする。「そのとき透は、自分がなんのために生まれてきたのかを知った」。透は航空自衛隊のパイロットになると決意するのだった。とてつもない難関をくぐり抜け、航空学生試験に一発合格した透は、志願者のうちわずか１％しか残れないＦ－１５のパイロットになった。自衛隊のトップ・パイロットになった彼は、26 歳でさらに最新鋭のＦ－３５に搭乗するようになり、その天才ぶりを遺憾なく発揮するようになる。「ただ私は戦闘機という機械に乗りたかっただけで、その戦闘機の飛ぶ空が＜護国の空＞だったのです」。たいへん優秀なパイロットだったが、英雄になりたいわけでもなく、護国の精神とは無縁だった…。

『ヒロイン』　桜木紫乃

「わたしは、逃げていたわけじゃない。見つからなかっただけ」。宗教団体が起こした毒ガス散布事件で指名手配され、17 年間逃げ続けた女性信者の物語。オウム真理教の地下鉄サリン事件を連想させますが、まったくのフィクションです。バレエ教室を営む母に小さいころからバレエでいちばんになること、そのために体重を増やさないことを強要されて育った岡本啓美（ひろみ）は、母の期待に応えるために必死に努力をしたが、ピークの中学のときですら次点までしかいけなかった。高校３年生になって、叔母に誘われて新興宗教団体＜光の心教団＞のセミナーに参加し、母から解放されるために出家をする。富士山のふもとにある教団施設に身を寄せ、５年の月日を過ごすが、多数の重軽傷者と５人の死者を出し世間を震撼させた＜渋谷駅毒ガス散布事件＞の実行犯である幹部と行動をともにしたために、何も知らないまま指名手配をされるに至る。彼女は、姿を変え、名前を変え、他人になりすまして、生きていくが…。「ママ、誰もトウシューズを履いては生まれてこんのや。みんな、自分に合（お）うた靴がある。啓美はやっと自分の靴を見つけたんよ。どこまでも歩ける、安い運動靴でな」。本当の自分を掴み、自分の罪を知るまで。

『街とその不確かな壁』、村上春樹

６年ぶりの長編。「本当のわたしが生きて暮らしているのは、高い壁に囲まれたその街の中なの」。夏の夕暮れ、きみとぼくが川を裸足で上流へと遡っていくと、きみはまたその街について語り出した。いまここにいるきみは本当のきみではなく、影のような身代わりに過ぎない。本当のきみは街の図書館で働いている。ぼくがそこに行けば、本当のきみに会える。そこに入るには特別な資格がいるのだけれど、ぼくのための場所はいつも用意されていて、＜夢読み＞になることを期待されているのだ…。秋になって、きみからの手紙が途絶えた。「あなたのものになりたい」と言ったきみと会うことができないまま、秋が過ぎ、冬になり、とうとうきみからの長い手紙が届いた。それを最後に、きみはまったくぼくの前から姿を消してしまう。きみのことを待ち続けながらぼくは東京の私立大学に進学し、でたらめに時間を過ごし、書籍の取次をする会社に就職し、45 歳の誕生日を迎えて間もなく、すとんと穴に落ちた。意識が戻ったとき、ぼくはきみが話していたあの街にいることに気づいた…。

『可燃物』　米澤穂信

『満願』で初めてミステリランキング３冠を達成し、翌年も**『王とサーカス』**で３冠、そして**『黒牢城』**では史上初ミステリ４冠、直木賞、山本周五郎賞を総ナメにした米澤さん待望の次作もミステリランキング３冠！ これがすごいのは、異色の戦国ミステリだった『黒牢城』とはまったく違い、今作が真っ向勝負の正攻法作品だからです。実力を見せつけました。拍子抜けするくらいオーソドックスでシンプルなあざとさのないミステリ。事件が起き、刑事が捜査し、解決します。たとえば、スキー場で起こった殺人事件の見つからない尖った凶器の行方、深夜３時の交通事故で複数の目撃者が「赤信号突破」だと証言しているのに逮捕に踏み切らない理由など。表題作の「可燃物」は、可燃ゴミばかりを狙った連続放火事件が発生し、容疑者をマークし始めたとたん、放火はピタリと止まってしまう。もう犯人は目的を達成したのか？… フェアで模範的なミステリ短編集！

『シェニール織とか黄肉（きにく）のメロンとか』　江國香織

江國さんを読むと幸福になる。自分のなかの勇敢な少女が踊りだすから。学生時代の「三人娘」の再会。「人は変わらないのだなあと、早希（さき）はしみじみしてしまう。若いころから、民子はみんなの話の聞き役だった。生真面目で寛大で、逃げるということを知らない人で、その勇敢さに本人は気づいてもいなかった」。